

巡検補足説明資料

1. 桐生の地形

桐生市市街地は足尾山地の南西麓、渡良瀬川の左岸に位置し、北東からの桐生川の谷口集落にもあたる。周辺は三方を 300m 前後の山に囲まれ、南西面だけ開けており、このような地形的関係から、市街地は北東より南西に伸びている。

市街地は、桐生川の扇状地と、渡良瀬川の沖積層上に位置する。

桐生川が存在は、桐生織物の発展に欠くことのできないものであるが、その源流は秩父古生層からなり、深い谷が刻まれ、急流をなした溪谷が続いている。上流部の地質や、集落が少ない山地であることから、川の水は清冽で、織物産業の有利な立地条件を形成した。

2. 桐生の街並みの形成

桐生の街並みの骨格は、16 世紀まで幕府天領であったこの地の代官・大久保長安手代・大野八右衛門が、当時、赤城原、荒人原と呼ばれていた地域に近在 54 カ村からの家を集め、計画的な地割を行って「桐生新町」とした事に始まる。

近在の村々の総鎮守であった桐生天満宮を赤城の森に移し、この門前から南へ向かって、大通りを作り、両側には地割された家々が軒を並べた人工都市ともいえる。街では定期市が開かれ、生糸、絹などの売買を中心とした市場町となっていく。

谷口集落として、山地と平地の産物交易の場としての桐生の存在は、城下町とは違った自治都市的な性格を有し始め、京都、西陣からの技術導入を得て工場制手工業が発展した。

長く織物の町として繁栄してきた桐生は、最近では機械、電気製品、自動車関連部品の製造など機械金属産業が基幹産業となっており、かつての織都・桐生からの変貌は著しい。

3. 織物産業発展の要因

すでに平安末期に布織物、室町時代には絹を産して取引されていたとされる。本格的に機業がさかんになったのは、上記 2 のまちづくりからである。江戸時代、絹織物は、京都西陣と共に幕府の保護を受け、江戸および京都などと取引を行った。また、西陣から染色、機織りの技術を取り入れて、研究を怠らなかった。

桐生は養蚕・製糸地帯を背後に控えた恵まれた環境でもあり、立地条件が良かったほか、東を流れる桐生川は清冽で、染色の仕上げに適し、また、水を引いて水車を動かし、動力源ともできた。

幕末のマニュファクチュア的生産形態から、機業の機械化による日本の先駆けの手工業地帯となった桐生は、明治から大正にかけて、桐生お召や羽二重の生産によって大きく飛躍した。

昭和 40 年、繊維工業の全工業中に占める地位は、工場数 1,864 で全体の 58%。従業員数、15,769 人で全体の 48%。製品出荷額 233 億円で全体の 45%であったが、最新の桐生市統計（令和元年。原典・工業統計調査）では事業所数 102 で全体の 31.2%、従業員数 1,203 人で全体の 14%。製造品出荷額 143 億円で全体の 7%となっている。

4. 桐生と大間々、桐生と足利の競争

桐生と西隣の町「大間々」（現在の群馬県みどり市）とは近世以降、競争関係にあった。大間々は扇状地扇頂部の町である。渡良瀬川の溪口集落であったとともに、足尾銅山への「銅（あかがね）街道」の宿駅や銅蔵、銅問屋の存在などで発展してきた。近世中期以降は物資の集散地であるのみならず、絹織物の取引も行われるようになった。桐生と大間々は激しいライバル関係となっていた。

桐生は当初、五、九の日の市、大間々では四、八の日に市が立っていた。大間々では糸や絹が桐生をしのぐ勢いで売買されていたといわれる。こうした中、1730 年代桐生新町と大間々の間に紛争が起こり、結果、桐生新町は、三、七の日に絹を中心に、大間々は四、八の日に糸を中心に扱うと決められ、以降、桐生の取引が優勢となっていった。

一方、18 世紀以降、桐生と足利との間の競合や紛争も繰り返されており、桐生から足利への出市禁止などの申し合わせもされたという。

5. 桐生市の現状とこれから

（1）概況

古くから織物のまちとして発展してきた桐生市は、大正 10 年（1921 年）に全国 84 番目の市として誕生している。市域の変遷を重ねながら、平成 17 年（2005 年）6 月 13 日には新里村、黒保根村と合併し、面積は 2 倍に広がった。

現在の桐生市は、群馬県の東南部に位置し、栃木県の足利市と接し、西は赤城山まで達している。東京には直線距離で 90 キロ、車で約 2 時間、JR または東武鉄道により約 1 時間 40 分で結ばれている。

（2）地域経済・産業

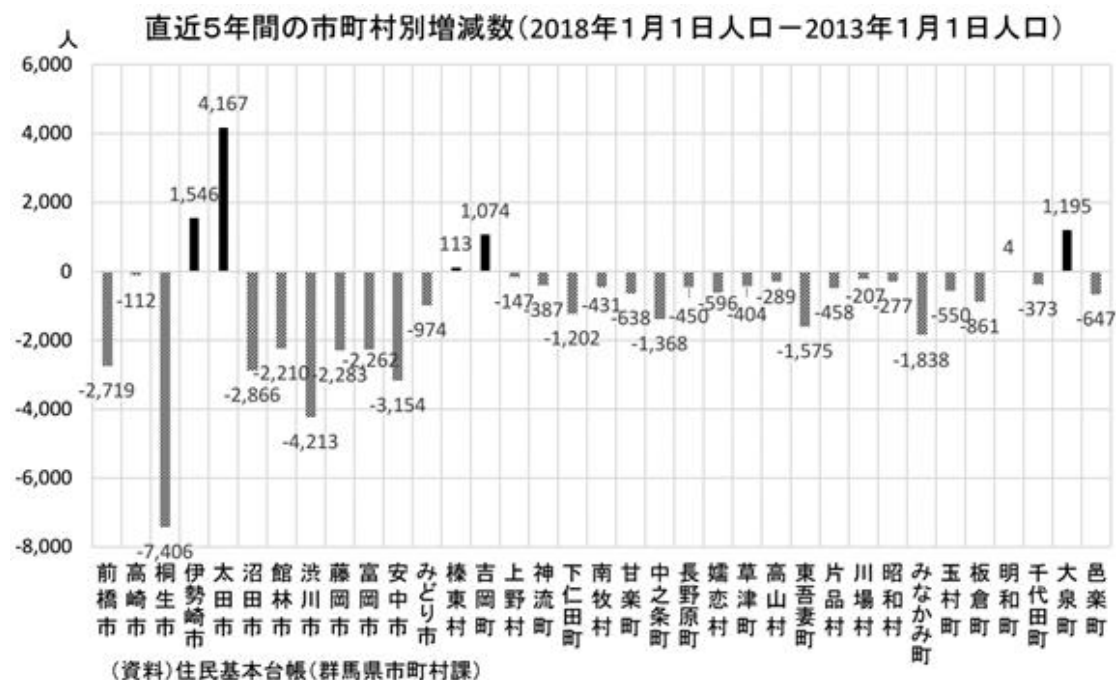
人口減少と高齢化が著しく進展している。群馬県内の 2013～2018 年の市町村の人口増減をみると、近接する伊勢崎市や太田市と比較して、桐生市の人口減少が著しいことが分かる。昨年、市の人口が初めて 10 万人を割り、市域の大部分が過疎地域に指定されている。このため、市では少子化対策、移住促進などを政策に力を入れている。

繊維産業の衰退のみならず、地形的要素もあり、伊勢崎市、太田市のように企業進出の受け皿となる土地を確保できなかったことが要因として考えられる。市全体の工業出荷額は、最近 10 年間の製造品出荷額は、ほぼ横ばい（直近では増加）ながら、従業員数は 9,800 人から 8,500 人と大幅に減少している。

ちなみに、かつて桐生市には SANKYO、平和、西陣（地元創業）の 3 大パチンコ機器メーカーの本社・工場が立地していた。桐生市の織物産業で培った技術に注目したことが立地要因とされている、しかし、2000 年初頭に SANKYO、平和の両社は本社工場を伊勢崎市に移転、本社も伊勢崎～東京に移転した。残りの西陣は 2023 年に廃業している。

製造業全体が衰退するなか、不安定な農業を支えるための副業として、1943 年に世界初のシイタケ人工栽培法（菌種駒製造法）を確立した森産業、地場産小麦を活用して、全国の高

級ホテル・レストラン向けに「冷凍生地パン」を専門に開発・製造している㈱スタイルブレドなど、国内でもユニークな企業が存在している。



(3) 歴史的町並み

織物産業は衰退したものの、今も織物産業の繁栄を伝える町並みが残り、空襲被害をほとんど受けなかった桐生は、近代化遺産の宝庫となっており、地場産業をベースとした文化、観光の街として多くの来訪者を迎えている。

特に、天満宮地区と本町一、二丁目には、約400年前の土地の区画(敷地割)に江戸後期から昭和初期に建てられた主屋や土蔵、ノコギリ屋根の工場など、絹織物業に係わるさまざまな建造物が数多く残り、織物業で栄えた桐生の歴史を今に伝えることから、2012年、国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されており、桐生を代表するスポットとなっている。

(参考：関東地方の重伝建地区は、現在6か所 → 桐生市桐生新町、桜川市真壁、栃木市嘉右衛門町、川越市川越、香取市佐原、中之条町六合)。

こうした歴史文化資源の存在などから桐生市の観光入込客数は、前橋、高崎に次いで、県内3位となっている。

ちなみに、「織都桐生案内人の会」利用者は、2021年度の730人から、2024年度には1,400人(概数)となり、年々着実に増加しており、担い手確保が課題となっている。

(出典は多数のため省略。)

以上